

ヒアマス第一回：この引き裂かれた時代に、アートを再定義する学校であり続けること

heamas no.1: In this torn apart age, remaining a school that redefines art is essential

三輪眞弘 松井茂 城一裕 高尾俊介

MIWA Masahiro, MATSUI Shigeru, JO Kazuhiro, TAKAWO Shunsuke

ヒアマスは「耳で聴く、今の IAMAS」として、教員を対話形式で紹介する非公式のポッドキャスト番組である。城一裕講師と松井茂准教授が聞き手となり、回替わりで迎えるゲストとともに「これまでの20年、これからの20年」をテーマに話し合った。

Web 2.0 時代に登場したポッドキャストは、その登場から10年が経ち、YouTube やニコニコ動画に代表されるビデオ配信が映像メディアの中心的なものになりつつある現在において、フレッシュなメディアでは全くない。しかし人類が誕生して以来、もっとも原始的なコミュニケーション手段として発話があり、ヒアマスは開学から20年が経とうとする現在のIAMASに関わる人々の交感を、できる限り「生」なものとして発信するメディアを目指し活動を行っている。

初回となる収録は、2015年7月16日（木）、ゲストを三輪眞弘教授をお招きした。三輪教授はIAMAS開学当初から教鞭を執り、現在メディア表現領域の第一線で活躍するアーティスト/デザイナーが集った伝説的なワークショップイベント「DSP サマースクール」を主催したメンバーである。収録では時代の変化に伴う学生と教員間の関係性の変化や、現在の社会情勢の中で大学が果たす意義について、現在をまたぐ40年の歴史的射程の中で議論を行った。



図1 第一回收録の様子

高尾：こんにちは。私は産業文化研究センター（RCIC）の高尾です。本日はストリーミングラジオ「ヒアマス」の第一回の配信を開始します。初回の聞き手は城一裕講師と松井茂准教授、ゲストは三輪眞弘教授です。ヒアマスは「耳で聴く IAMAS」として、教員・在校生・卒業生の活動を紹介する非公式のポッドキャスト番組です。A サイドは学内外の展示やイベント情報を紹介します。IAMAS の Web サイトでは、様々なイベントの告知情報等が公開されていますが、IAMAS の教員同士が語り合って、それぞれが考えていることを議論しあうような場というものを、もう少し外部へ向けて発信するのはどうか」ということを RCIC 内で議論し、今回このような取り組みを行うことになりました。では出演される方々、お願いします。

城：では僕から。IAMAS の講師の城です。今回のこの話は、高尾さんが企画されていますが、実は彼とは前の職場である東京芸術大学の芸術情報センター（通称 AMC）でも同僚でした。そこではこのヒアマスのように 2010 年～2012 年にかけて芸術情報特論¹という授業で、毎回ゲストをお呼びして Ustream で配信するということをやっていました。

三輪：みんな IAMAS に来ちゃった。

城：そう。言われちゃいましたが（笑）、僕は 2012 年から IAMAS に来ていますが、その後に、同じポジションに就かれたのが松井さん。

松井：ふられたんですね（笑）。今年から僕は IAMAS に来たんですけども、城さんが IAMAS に移られたタイミングで AMC に入って、その次の年に城さんが IAMAS に呼んでくれて、三輪さんと三人で（鼎談しました²）。紀要にも掲載していました。それが今回の第一回の、ヒアマス♪？

三輪：ヒアマス♡

松井：ヒアマス♡につながっている（笑）というのが、ホスト側の状態でしょうか。で、ゲストは三輪眞弘さん。

三輪：ゲストとしてお呼びいただき、大変光栄です。多分、なぜ最初のゲストとして僕が選ばれたかというのは、おそらく想像なんですけれども、IAMAS の設立の時からいるメンバーの一人ということもあると思います。それこそ、来年が 20 年。IAMAS の成人式典というのをやりたいと、勝手に妄想を膨らませているんですけど。もう 20 年ここにいます。三輪です。

城：今回ヒアマスをやるに当たり高尾さんと相談して、我々ホストの方で何かしら一貫性を

1 2010-11 年度 芸術情報特論＋ <https://vimeo.com/album/1805799>

2 情報科学芸術大学院大学紀要 第 5 巻「音楽と録楽の未来」収録

http://www.iamas.ac.jp/iamasbooks/presentations/journal_of_iamas_vol-5/

持たせられるといいな、という話をしています。その中で、今お話があった20周年、を一つの鍵として考えていきたいと思っています。これまでの20年がどういうものであったのか。それだけだと「おじさんたちの懐かしい話」で終わってしまうので、それは避けつつ、ともに日々研究を行っている若い学生、彼らが焦るくらいのこれからの20年の話、その両方の視点からを毎回話をしていけると、僕らにとっても刺激があるであろうし、これを聴いている皆さんにとってもより刺激的なことになるんじゃないのかなと思っています。

三輪：いや、そういうけどねえ。昨日だよ。法治国家がひっくり返るような方向に国がいつてねえ。これってどうよっていう。

松井：これからの20年っていつでもねえ。

城：それこそまさに、これからの20年に関わるようなことですよね。僕の子どもが5才と0才なんですけど、彼らの人生を考えると、まったく人ごとではない状況ではあって。一方で面白いというのが適切かどうか分からないですけど良いなと思ったのが、20前後の若者が中心となっている SEALDs³。彼らがすごくアクティブだということです。ちょっと考えてみると、4年前の福島の時に彼らは中学生とか高校生で、自分が中学生とか高校生の頃を、まさに僕は20年前に高校生だったんですけれど、思い起こすと色んな不満っていうのを上の世代に持っていた時期だった。直近の上の世代っていうのに対して、一番不満を持つような年齢でもあって、そういった影響も実はあるのかな、と思ったりしています。

三輪：やっぱり明らかに変わったよね。311であれだけひどい目にあっても、今回みたいなデモとかっていうのはあんまりなかったから、いよいよ少し何かが変わってきたんだろうとは思うけどね。でも、IAMASの話で言えば、いよいよIAMASを出て社会へ出て行くというときに、基本的には「いかに生き延びるか」ということ、それしか教えることないような気がするんだよね。

松井：一応20年前ということがあるので少し触れると、三輪さんがドイツに18年居て、(IAMASが設立される時期に)戻ってくることになったんですよね。そのタイミングっていうのは、逆に言うと、時代状況というのも含めてどんな感じで始まったか？ということと、日本がどうだったか？ということですね。

三輪：松井さんに話すまでもないと思うんだけど、ずっとずっと明るかったですよね。それこそメディアアートっていうものが次の未来の可能性であり、明るい希望のように見えていた時代だし、IAMASとほとんど同じ時にできた NTT ICC⁴なんかも何年も前からそういう活動をして、Ars Electronica⁵でこういうものを作りますよ、と派手にやっていた時代だっ

3 シールズ：Students Emergency Action for Liberal Democracy - s <http://www.sealds.com/>

4 NTT インターコミュニケーション・センター <http://www.ntticc.or.jp/>

5 オーストリアのリンツで開催される芸術・先端技術・文化の祭典であり、メディアアートに関する世界的なイベント。 <http://www.aec.at/>

た。僕はそこまで明るい気持ちではなかったけれども、日本でやっぱりそういうところができるっていうのは、すごく意味があるし、素晴らしいと思っていたというのがあるのと。昔話はあんまり話したくはないけれども、もう一つはお金だよ。僕は専門が音楽で作曲だから、自分の曲を演奏家にやってもらうのに、「5万円を3万円にして。友情で。」みたいな(笑)。そんな世界でいたら、IAMAS がやった Interaction⁶の予算規模は2000万円、桁が違うお金が動いていて。そこでメディアアートってシーンがそういうお金の中で動いていたり。それから、IAMAS ができた時はコンピュータグラフィックスをやろうと思ったら、シリコングラフィックスとかいうやつで、200万や400万円のマシンがないと出来なかった。それは個人や学生が持てるものではなかったから、IAMAS が在ることはそういう意味で価値があったんだけど。そういうようなことは、今は学生がもっているラップトップでできるような時代だから、時代は変わったけれども。でも、今から振り返っての20年というのは、今から見れば理由もなくだけど、未来に対して夢が描けた、ある意味では最後の時だったのかもしれないね。96年がスタートだから。

松井：「戦後」みたいな話もあるんだと思うんですけど。戦後50年、半世紀だったわけですよ。ちょうど戦後復興、高度経済成長みたいなことがずっときて、いわゆるバブル経済があって。当時バブル経済は言ってみれば崩壊しているんだけど、崩壊するギリギリのところで準備されたメディアセンターとかこういう学科の学校が出来上がったところで。既にそこが頂点というか。最初が最高、最長不倒、というところから始まっているんですよ。

三輪：確かに、僕がドイツにいた頃がバブルだったので日本のバブルは全然知らない。

松井：そういう流れの中で、もちろん震災や自然災害は経済とは違う状況なんだけれども、ある種モダニズム的な工学の技術のように、ひたすらどんどん上がって行けば良いという状況がご破算になる20年だった気がするんですよ。その中で、この学校は今にきているというところで、三輪さんが先ほど「成人式」と言いましたが、その時産まれた子だと、ある意味で良い時を知らない成人式を来年迎える、ということですよ。日本って、こういう国なんだっていうことも含めてだけれども。そういう子たちが、SEALDsみたいな動きになっているんだと思うんです。で、あまりさっきから昔話って確かにアレですけど、三輪さんにとって、かいつまんで言うところの20年はどんな感じでした？

三輪：IAMAS にからめて言うと、正気に戻りつつある方向で進んできたと思う。というのは、今のお金の話じゃないけれど、それでもIAMAS がスタートした時というのは訳もなくおめでたい雰囲気があったんだけど、さっき言ったように僕はもともとメディアアートの人間ではないから、現代音楽シーンなんかとのギャップに結構驚いていたわけよね。そこから、内省的とは言わないけれども、少なくとも頭を冷やしてきつつあって、「メディアアートって本当のところ、何なんだろう」ってことを、僕自身はずっとそうだったつもりなん

6 1995年から隔年で4回、岐阜県大垣市のソフトピアジャパンを会場に開催されたメディアアートの展覧会。

だけれど、全体もそう考えるような雰囲気になってきていることは、僕にとっては、ある意味で良い兆しだと見える。

松井：逆に、城さんは当時高校生で、IAMAS ができることは知っていた？

城：そうですね。高3の時に IAMAS ができます、というアナウンスが、InterCommunication⁷ か WIRED に乗っていたことを覚えています。僕にとっては当時インターネットっていうのが本当にすごいものに思っていて、例えばインターネットは1993年くらいに一般利用が始まっていますが、地元の茨城にある水戸芸術館で体験イベントがあって、そこに行くとブラウザってものが触れる。ローリング・ストーンズのサイトとかちょっとみるだけ。Netscape 1.0 とかで（笑）。そんな時代に IAMAS ができるということですからすごく魅力的だったのですが、開校当時は専門学校だったということもあって、当時進学校に行っていた僕は「面白そうだけれどなー、でもなー」と日和って（笑）、大学進学を選びました。

三輪：4年制の大学じゃないからね。

城：はい。大学は九州芸術工科大学というところに行って、2000年に卒業してそのまま修士へ行ったら、2001年 IAMAS に修士課程ができる、と。なんで1年早くないんだと、その時はムッとしたのを覚えてますね（笑）。で、後輩に受けなよと勧めたりしました。ただ、その間に三輪さんと赤松さんが99年からやられていた Max のサマースクール⁸に行って、それが人生の一つの転機になって、その後一緒に活動するようになった友達たちとも出会えました。

三輪：僕らもそのサマースクールで知り合ったし。流石にそんなのにわざわざ来る受講生って、やっぱり志が高いのかね。みんな色んなところで活躍しているし、連絡もあるよね。

松井：それは普通に学外というか、外部の人達を集めるような趣旨だった？

三輪：そう。集中講義っていうか。

城：朝から晩まで、Max やって。

松井：城さんは、それで IAMAS とはちょっと接点を持ちながら、つかず離れずというかんじでした？

城：そんな感じですね。で、たまたま縁があって2012年からお世話になっています。

⁷ 1992年から2008年までNTTインターコミュニケーション・センターが発行した季刊『InterCommunication』。

⁸ 1999年から2003年まで5回にわたって開催されたMSP/DSPサマースクール。

松井：三輪さんと、僕たちでは世代がちょっと違うというところがありますけど（笑）。

三輪：シュン（笑）。

松井：効果音入れてください（笑）。城さんは、自分の世代の感覚でいうとこの 20 年ていうのはどういう 20 年？

城：僕の感覚は先ほどの三輪さんとちょっと違うところもあります。インターネットの登場で、「自分たちの手でやったことが、世に届く」みたいな方向に世の中が変わるだろうと思い込んでいて、そう思ったからこそサマースクールにも行ったりしていたんですが、それまでは大きな会社であるとか、すごいアーティストじゃないとなかなかできないようなことが、自分たちでもできるようになりつつあるような感じがしていました。実際、この 20 年を見ていると部分的だとは思いますが、少なくともすごく近い身の回りではやったことが世に届いている。当時大きかった会社は今はそんなに目立たなくなっていて、それよりもサマースクールで出会った友達たちのほうがよっぽど良い仕事をしている、という状況になっているところを見ると、当時の思い込みは間違ってたなという印象があります。日本ではなくて世界全体を観てもやっぱり、同世代の似たようにインターネットに煽られた人たちが、それよりも前からやっているビジネスの人たちよりも先を行っているというのは否定出来ない事実で、彼らによって世界がどんどん変わっている。それは良いところだけではないと思いますけど、その変化をこれからの 20 年につなげていくと、そんなにお先真っ暗ってわけでもないだろうとも思っています。これから変えられる部分というのはあると思う。でも一方で、旧来のものの「強さ」というのもヒシヒシと感じていて、それに真向から向き合わず上手く「ジャンプする」みたいなことを、学生とやっていけると良いなと思っています。

三輪：でもそういうブレイクが起きそうな期待はあるよね。みんなに言っているんだけど、普通に、素朴に、国会で何が決められてナントカっていう情報がテレビしかない時代って、もはや想像できないじゃない？

松井：昨日はテレビもやらなかった。

三輪：NHK やらなかったね。だけどニコニコ生放送でストリーミングは流れていた。昔は「テレビでやらなかった」だけの世界なんて今は考えられないじゃない？それはポジティブに感じられるし。寧ろ、そういうものを大切にする必要があるんだろうなという気がする。

松井：三輪さんは何が原因で、この国でこういう状況を生んでしまっていると思います？

三輪：世界全体の話から言うと、資本主義自体がどうなのよっていうこともあると思う。でも日本の場合、一番大きい原因は、同調圧力。何も言わないことにする、っていう。だから（先日）若者が集まったことは、日本社会にとっては画期的な出来事だって言えるんだろうけど。それこそ年代から言ったら、そんな感覚を持っているはずもないような若い世代が、

政府や統治機関ていうのをお上だと思って、「お上には原則たてつかない方がいいよね」っていう雰囲気が世代世代で受け継がれていくっていう。ちょっと信じられないような状況。

僕は、特に反対の極端であるドイツにいたから。(ドイツは)言いたい放題言まくった中で、折り合いをつける。やっぱりそれは民主主義やっついこうっていう以上は、日本人も社会も、もう少しそういう形にならないと機能しないからね。

城：でも、例えば IAMAS の中に限っては、同調圧力みたいなものっていうのはあまり無いですね。

三輪：IAMAS は見事に同調圧力はないし、そうあって欲しいと思ってやっているけれども。大学院が出来た時に、ある大学を退官された先生が IAMAS に来てくれた。当時は学校がスタジオ 1、2、3、4 とジャンル別にグルーピングされていたんだけど、教授会をやるとその先生が僕と同じ分野だったので、すごく僕を守ろうとしてくれるわけ(笑)。何故そんなに力が入ってるんだろうと不思議に思っていたんだけど、要するに、その先生がいた大学では教授会には派閥があるに決まっていて、小さなグループでお互い権利を主張しあってやっていくのが当たり前だったよう。見事に IAMAS っていうのは派閥がないというか、教員全員バラバラだから。そういう意味で良いバランスを持っているんじゃないの？僕は徒党を組むっていうのが嫌い。現に僕らの同僚は誰も徒党を組んだりしない。分野が違うからっていう理由もある。違う分野だから一人でやるしかなくて、一人一人がフルパワーでやっているというのが IAMAS の良いところだと思う。

松井：確かに徒党は組んでないですね。教員というか組織の側で言うと、そうなのかもしれない。この 20 年間の学生っていうのは、どういうふうに見えていますか？今まで卒業した人たちを周りを見かけることが多くて、ある種フリーな社会の中のシーンを作る側に回っているとは思うんですけど。三輪さんから見て、学生というのは変化してきているんですかね？

三輪：変化してきているかな？それこそ 20 年前は、「大学で美術を勉強してきました、油絵を描いてきました。だけどコンピュータは使ったことがありません。」っていう学生をどうすりゃいいんだよ、みたいなことが真面目に話し合われたりしていた時代。今はもはやそういうことはなくて。僕の勝手な解釈だと、わざわざ IAMAS を志望してくれるような学生っていうのは、そもそも何か志をもっているんだろうと思う。今いる学生だって普通に就職を望めば申し分なく就職できるような人たちが、わざわざ来るっていう。その一点で、昔からそうだったし、毎年色の違いはあるけど全体で学生の質が変化したというのは感じないな。

松井：逆に、社会は変わっているのに来る人は変わっていないということは、どうなんだ？(笑) まあ、変わった人が来ているということかな。高尾さんに訊いたほうがいいのかもしいれないけど。一方で「IAMAS はどういうことをしようとしてきたのか、そしてこれからどういうことをしていくのか？」「学生たちは何を望んできていて、それに我々はどう応えて

いるのか？」ということについては、僕は来たばかりなので、学生と話していても自分なりの色々な考えはありますけど、そういう質問をされたりってことがあるんですが、三輪さん的にはどうですか？

三輪：もう一度質問を繰り返して？

松井：「今どういう人たちが来ているか？」「変わっていない」ということだったんですが、IAMAS 側が「どういう人たちを受け入れたい」という、何らかのメッセージを出しているんだと思うんですね。だとすると、それはどういうメッセージで、「IAMAS は何をする学校」というメッセージを出している、三輪さんは思われますか？

三輪：僕個人は、一番変わらない根本のところは「自分の頭で考える」ってことを身につけていってということだと思うんだよね。すごく抽象的だけど。つまり、逆を言えば日本の特徴だと思うけど「自分の頭で考える」ってことを一度もしたことがない、要請されたこともない、っていう人が多すぎると思う。僕にはそう見える。博士課程に進む学生もいるけども、社会に出るって時に一度だけ自分の頭で考えてやってみて、失敗しても全然 OK なんだけど、そういうエクササイズを IAMAS でやるっていうことが、IAMAS の意味のように思うし、それをやるには理系の研究室とかではなくて、こんな風に多様な価値観が集まっているところでやることによって、活動を相対化して見ることができる環境だっているのが IAMAS の価値だと思うけどね。

城：学生は変わってないとしても、この 20 年で教員の側は変化してますよね。より具体的に言うと、年齢層がだいぶ上がってきている。20 年前の当時は、三輪さんが僕くらいの年で。学生との年齢差はせいぜい一回りくらいの違いだと思うんですけど、今は三回りくらい離れて、教員がお父さんと一緒くらいの年齢になってきている。学生と話していて時々思うのは、向こうが勝手に同調圧力を感じてしまうというか、教員の側を権威とみてしまうことがあるなど。失敗していいよ、って言われても、やっぱり学生からみた時にお父さん、お母さんなんですよ（笑）。「って言ってもそうじゃないんだろう」って。そんな感じがあるようにもみえて。

三輪：僕も城さんと同じくらいの時に IAMAS に来て。2 年目に、当時ドイツにいたときの友達に連絡をとった時があって。その人に「お前はとにかく、人生でめったにありえないくらい最高の時間を過ごしているはずだから、大事にしろ」って言われたことがあるんだよね。確かに、当時は学校の中で何をしようが全員が友達みたいにやってて、県立の学校としてはお咎めがあるようなことをやってたわけ。当時は決まりがなかったから、無法状態のところから始まって。それは貴重な時間だった。そういう意味での素晴らしさもあったし、それが年齢も年代を重ねるごとにそうではなくなっていくって、老朽化するって意味もあるだろうし、逆に言う「オトナになった」。良く言えばね。

学生に接する方も、経験値が毎年上がっていくわけだね。去年学生がこういうふうにした

ら、結局良くなかったんだ、みたいなことは、教員だったら誰だって体験したことがあると思うんだけど、その逆に1年生のこのタイミングでコレをやっておかないと絶対に卒業できない、みたいな経験値は蓄積されていくんだよね。それはいいことだし。

あとは、僕も当時若かったから「先生」って呼ばれるのが気持ちよくなかったもんなんだよ。だけど年をとってきて、ある日「俺、先生って呼ばれるの、OKにしよう」って思ったんだよ。前は「呼ばないで」みたいなことだって言ったことがあったんだけど。やっぱりそれは僕がおとなになったからだと思うんだけど、僕らは少なくとも権力を持っているんだよ。日本の巨大な権力構造の一番下っ端にいて、他の人に対しては持っていないんだけど、学生に対してだけは点数をつけたりする権力を持っている。それをあたかももののように、友達のようにするほうが欺瞞だなんて思うようになった。だから先生って呼ばれて OK だし、そのかわりこっちも一生懸命やりますよっていう。一種のロールプレイングゲームみたいになっちゃうんだけど。事実は事実だからね。それでいいんだろと思うようになった。

城:「あるとき」ってどういうときだったんですか？

三輪: 権力構造ってものについて考えた時かな。

城: 僕はまだ「あるとき」の手前で、先生って呼ばれるのがやだなんて思ってしまうんですよね。

三輪: 年齢もあると思う、友達のように学生の言っていることを聞けるし、年があんまり離れるとそうじゃなくなってくるっていう話かもしれない。

松井: 先生とか教員ってこととつながるかわからないんですけど、311 以後って言って良いのかわからないけれど、それくらいの時期から、自分が言っていることが相手に通じないんだってことがすごく増え始めたような気がしているんですよ。それは、キャッチコピーみたいなわかりやすいことをやっているわけじゃないんですけど、僕が考えてきたことのほうが少数派になったんだっていうことを思うようになったのは、この5年くらいなんですよ。それまでは、「自分のやっていることをわかんないやつは馬鹿だ」とかね(笑)、それくらいで切って済んでいたんですけど。「わからない」ということの関係性が、同じ土台の上において違うっていうことではなくて文化体系が違うような状況に、自分が勝手に切り離されているような気がするんだけど、逆転した感じがしたんだよね。そのタイミングに自分がマイノリティの側にいて文化状況の中で「これはマズいな」っていうふうに思うようになったっていうのが、その頃で。自分が作品発表するっていうのとは違う意味で社会に関わらなきゃいけないような気がし始めたのが、僕にとっては教育っていうようなことを考えなきゃいけないようになったのはその辺りの時期かな。

あとは、ある種の自己規制みたいなものが社会の側で強くなりすぎているような気がして。学生にも教員の僕ら自身も、もちろん権力っていうある一方的な関係性っていうのもあ

と思うんだけど、僕の研究の中での持論かもしれないけれど、戦後みたいな問題が作り上げてきたことっていうのが、日本人がもともと持っていたこと以上の過剰な自己規制だと思う。「この学校は何する学校ですか？」って質問も、本来ならそんなもの自分で考えろよってことだし。「何がしたいか？」ってのも、その学科にいるから何をするではなくて、自分でやりたいことを目的も含めて設計しなくてはいけないことなんですよ。それは IAMAS で、三輪さんの場合、現代音楽のシーンで表現をしているわけだけど、IAMAS で音楽を研究しようと思った場合は、音大にいるわけではないから、IAMAS で音楽をやるということを「定義」しなくてはいけない。僕はまだこの数ヶ月しかいないけど、来てみて面白いのは、それぞれの主査の先生について何かをする時に、先生は全員メディア表現っていう専攻の中にいるわけだから横並びなんだけど、学生はやることを定義していかないとできないわけですよ。それを「めんどくさい」と思う学生もいるかもしれないけど、IAMAS は自分でその活動を定義できる場所。たとえば芸大に進学する場合音楽学部なのか美術学部なのかによって、その瞬間にやるかが決まってしまう。でも「そこかよ」というのがヤバいなって思っている。

三輪：それが楽なんだよ。課題が与えられて、課題を上手くこなすっていうのだけ考えていれば良いなんて、そんな楽なことはないけど。そんなのどかな世界ではないんだよ、昔から。そのことに気がつかないっていうのは、生存力を本当に落とすよね。

松井：電力を使うっていうことに対しても、自己規制的に考えて生活を決めている。決められてるとも言えるけど、自分で決めている自己規制みたいなことから逃れられないから、原子力の問題も思考停止になってしまう。でも変えられるわけだから。昨日の NHK の話にしても、NHK が権力的な構造にあるっていうことも思う一方で、NHK が国会中継しないってことも Twitter で出た。Twitter の NHK 広報アカウントで「この皆さんから頂いているご意見を責任者にお伝えします」という投稿があった。その後に、放送のされ方には問題があったとしても「放送することになりました」として放送がなされた。権力的な構造がある一方で、それと同時に外からの意見に考えて初めて気づくくらいの自己規制に固まった人たちがいるっていうのが怖い。崩せる部分っていうのはいっぱい合って。権力として決められていることもあるんだけど、そうではない自己規制みたいなものを崩すメディアとして、インターネットや SNS っていうのは中東のジャスミン革命みたいな、オフィシャルな Twitter アカウントができた瞬間に、それはオフィシャルなものではなくなっていくところに、SNS っていうメディアが持っている浸透力とか、日本で言うと戦後という言葉で構成されてきた自己規制を破れる可能性を考えたい、考える学校であってほしいなと思いますね。

三輪：うん。それを言うと僕もインターネットの良いところはテレビじゃないところだと思うけど、中東の春に関して言う場合、もう一つスケールが変わって。そういうもの（SNS やインターネット）を浸透させることが民主主義やアメリカみたいなところがのどかに暮らしている人たちのところへ襲いかかっていくときの武器になっているとも考えられるじゃない？そう言うところまで考えなくてはいけないと思う。

松井：それはまさに両方で。アラブの春とグローバル・ジハードっていう形でISが使っているSNSの使い方っていうのは全く一緒なんですよね。組織の構成のさせ方が。同じメディア技術がどっちにもなるっていうことを、どう考えられるかってことを身につけてもらわないと困る。歴史的に言えば大阪万博前後、1970年代くらいにクロードサーキットのフィードバックのテレビっていうのが登場して一方で警備会社を使うわけですよ。もう一方では前衛芸術とされていたビデオアーティストの作家たちが使う。同じ技術を使って、究極的に前衛的な芸術と究極的にパノプティコン的なものへと向かっていく。この構図っていうのは、技術とアートっていううちの学校が扱っている部分ですよ。



図2 三輪真弘教授

三輪：ありがとうございます（笑）。IAMASの永遠の、最も根本的なテーマです。割合、前半のIAMASは「メディアアート」の学校だっていうふうにイメージしてる人が多いと思う。決して今も変わっているわけではないけど、「メディアアート」っていうジャンルの学校ではなくて、社会学とか含めて分野を広げつつ「アートを再定義する」ところを一生懸命やっている。そういう意味でアートじゃない領域の活動も紹介されている。それはいいことだと思う。僕らはそういう風に（社会や時代を）観ているんだ。

城：今の話を受けると、IAMASはジャスミン革命を生み出すこともあるけど、ISを生み出す可能性を増やす場にもなり得ると聴こえます。その場合に何か別の軸も必要になると思うんですけど。それは何になるんでしょうね？

三輪：そんな難しいことを。でも答えは、自覚的に考えるってことしか、言いようがないんじゃないか。例えばNHKがこれだけ関心が高い局面を放送しないっていうことが、何を意味しているか。一番大事なことが報道されない。「何が報道されたか」について驚くよりも「何が報道されなかったか」を調べるほうが、世の中を正しく理解できるかもしれない、って思っちゃうくらいだよ。そういう自覚だとか、植民地化とキリスト教の布教がリンクしてるようなもんで。それと民主主義も同じような形をしてるんじゃないかって考えてみることでか。そういう思考を自覚的にもっているかどうかで、会社に勤めていてはできない、IAMASだけではなく大学で学ぶことの価値なのではないか、それを大事にしたいよねって思う。

城：多分「自覚的であること」はIAMASの中で実践できると思うんですけど、その時にどちらにいくか。ISも非常に自覚的な人たちがコントロールしている。他の例で言えば、最近イタリアのハッキングチーム社がハックされて、WikiLeaksで流出するという事件があった。両方共に非常に自覚的な人たちのあつまりで、どちらにも行きうる。その時にどういう判断をするのか？委ねるのか、そうではないのか、倫理って言葉で言えるのかもしれないのです

が。

三輪：そこから先が「芸術」の話になってくるんだと思う。今の話はどこも間違っても論理的にも破綻してない。そして、日本が武装しなければ攻撃される、奪われるっていうのは歴史を振り返ればそう結論付けるのは決して間違っは居ないわけなんだけど、その上で僕らがどうやって生きていくのかっていうのは、もう少し違うレベルにある。もちろん、僕らが生きてるってことは電気によって成り立ち、中東の石油によって成り立っているんだけど。それを自覚した上で、宇宙の星屑の中からどうしてここに生まれてきたんだろうっていうスパンでものを考えることが、一番必要なことで、世界的に、とりわけ今の日本でもっと失われ、影を潜めている部分だよね。なくなるはずはないのに、影を潜めてしまっている。これはおかしいことだから、それこそが俗にいうアーティストの役割。情勢を相対的に観ること、どんなに弱ちくったって。それしか希望がない。

城：その能力って、言って教えられるものなのですかね？

三輪：技能じゃないからなかなか教えるのは難しいよね。でも、最初に言ったように「自分の頭で考える」という技法くらいは訓練できるような気はする。生き残るためには今どういう可能性が見えていて、自分がどの道に進めばいいのか、トータルで判断する能力っていうのは基本中の基本だと思う。国家だって一緒だと思う。割合ははっきりとした知識と能力さえあればいい。最後に行く判断っていうのは、跳躍するわけだよね。自分の人生だったら判断によってきまった運命は引受けなければいけない。その引き受ける覚悟みたいなものは、別の次元のものじゃない？そういうものを考えられたらいいよね。

城：それは（教員も）、覚悟してるっていうのを隠さず見せていくべきってことですかね？今の話を伺っているところで言うと、失敗してるのところとか。確かに年上が失敗している様を見ることから、感じ得るものはあるのかなと。

松井：ISの話、ちょっとだけいいですか？ISの問題とかに関しては、最終的に寄って立っている文化っていうのが、最終的な判断をどうしてもしてしまうと思うんですよ。それはキリスト教圏とイスラム教圏の戦いっていうことを抜きにしては語れないわけだし、ただ、それを相対化した考え方ができている人が両者の側にいろいろな形で居るっていうことが大事なんだと思う。ある種の差異、差を見つけられる力っていうのが芸術の力で、その差に対して判断していくことは教えられないと思う。ただ、差がある、っていうことを認めることは教えられると思う。そこまで出来た上で、判断はその人間に任せることしか出来ないと思う。土台としての「差異を明らかにすること」は出来るはずだろう。それ以上の「こっこのほうが良いんです」という判断は、三輪さんの言う意味での教育や権力とも重なっていく部分だと思う。

イギリス人なのに IS に行く人もいる、寧ろアメリカ人は相対化できないのに、イギリス人は相対化できて、実はそっちへ行く人もいたりする。これは一つの判断としては、芸術や作

品制作に関わる判断と結構似た判断な気がするんですよ。良いか悪いかの倫理的な話すら越えた問題をどう考えるのか。それは解決は絶対はないけれど、議論をひたすら続けていくことってというのが多分今一番重要なんじゃないかと思うんだけど。

城：であるとする、様々なところで議論する様は、やはりみせていったほうがいい、と。

三輪：見せていったほうが良いし、特に日本の場合国会がいい例だけど、日本でまともな議論っていうのはほんとに珍しいよね。二者の議論よりも深め合うような議論は、ものすごく難しいけど、そういう場を作りたいよね。

松井：大学っていうのは、日本国内でギリギリそういうことが許されている場所。合意できないことでも議論できる、決めなくていい場所っていうのは重要なんですよ。国会はどちらかに決めなくてはいけない、運営できないから。でもそれではヘゲモニー争いにしかならない。議論をするっていう習慣を持っていない人たちが議論しているから恐ろしいんであって。IAMASの中で議論をするっていう習慣も、どちらかに引き込むんじゃなくて、全然違うタイプの人たちが集まっているわけだから、良いんじゃないのかなと。

城：このポッドキャストも極力議論した方が良いと（笑）

松井：僕らが三輪さんに同意する必要もなかったり（笑）

松井：（卒展での）発表の際の印象では、よくもここまでと思うほどバラバラなものが並んでいた。学生が社会に出た時に振り返ったら、「あんなことは他ではなかったな」と気づけると思うけど。IAMASが、そういう状態を続けていけるかというのが、今後に関わるのではないですかね。

三輪：うん、明るく生きよう（笑）